

漢字の指導（先日通級指導に行っている学校の先生方に配ったレジメです）

漢字が苦手な子の理解とその支援

学期末に成績をつけていると漢字が苦手な子が気になります。特に、漢字だけが苦手な子もいます。私も漢字が苦手です。学校で返してもらった漢字テストを親に見つからないようにトイレに流したことも何度もあります。4年生の漢字テストで「飛」ととんでもない（飛んでもない）漢字（もはや「漢字」ではなく絵です）で描いたのです。担任の先生がそれをでかでかと黒板に写して、クラスみんなが大笑いをし、その上に1時間正座をさせられました。泣きました。50数年前はそんなことが学校でされていました。その担任の名前、今でも覚えています。「〇〇！！」今の時代であれば「書き障害」として通級指導を受けていたかもです。私と同じように漢字で困っている子がクラスにもいるでしょう。そんな子の助けになればとこれを書いています。

つまづいている子どもに気づいた場合、まずどのようにつまづいているかを分析します。これを「つまづき分析」と言います。分析をしたら支援を考えます。漢字の間違い分析する場合、その間違い方を見ていきます。漢字には三つの要素があります。一つ目は「意味」です。漢字は表意文字と言われるように意味があります。二つ目は「音」です。つまり読み方です。三つ目は「形」です。ではその要素による間違いパターンとその支援を見ていきましょう。

●「意味」でつまづいているパターン

漢字の間違いに「同音異字」（ここでは「同訓異字」も含まれます）という間違いがあります。意味的に近い「会う→合う」や「多い→大い」などはよく間違えます。熟語では「神話→新話」など一方の漢字を間違える場合があります。しかし、「助詞→女子」のような熟語全体の間違いは少ないです。大人でも「家庭訪問？家庭訪門？」って悩むことがありますね。玄関まで行って話をしなければ「家庭訪門」でですね。

このような間違いを頻繁に起こす子どもは、漢字の三要素の中の一つ「意味」がしっかり覚えられていません。漢字を覚える時に、形の方に注目しすぎているのかもしれない。また、広汎性発達障害(自閉症スペクトラム障害)の子どもは見えない意味の理解よりも見える形の処理が優れているため「同音異字」間違いを起こしやすくなります。

このような誤りの多い子には、漢字を覚える際に部首の意味（「さんずい」は水に関係するなど）に注目させたり、絵と漢字を対応させたりしながら、漢字の「意味」を意識させるような練習もよいでしょう。一般的な漢字練習では漢字の読みに漢字を当てはめるタイプが多いですが、読みがついていなくて文の内容から漢字を当てはめるタイプの練習も有効です。「教材倉庫」には「ピッタリ漢字を入れよう」という教材があります。文の内容から考えてピッタリ当てはまる漢字を入れる教材です。

●「音」でつまづいているパターン

この子たちは、意味が似ている漢字を書いてしまう子たちです。意味が似ている漢字を書く間違いとは「店で牛(にく)を買う」や「秋から雪(ふゆ)に季節がかわる」のような間違いです。「肉→牛」「冬→雪」のように意味的に関連のある漢字を思い出して書いてしまう誤りです。熟語では「先生→生先」や「京都→東京・都京」のように漢字の順序が入れ替わったり意味的に似ている熟語になったりします。ある5年生の漢字が苦手な子に「知っている漢字を書いてごらん」と言ってマス目だけの紙を渡して書かせると15分ほどの間に100文字ほどの漢字を書きました。途中で「この漢字はなんて読むの？」と質問しても答えられないものが多くありましたが、文字の形は丁寧でした。次にそこに書かれた漢字を使って漢字テストを作ってやらせてみましたが、いつもと同じように散々な状態でした。

このようなタイプの子は、頭に漢字が入っているのですが、漢字の三要素の「音」の部分がしっかり覚えられていないので書きたい漢字を思い出せないのです。この子たちは低学年の時は読みが苦手だったとよく言われます。九九を覚えるのが苦手だったという子もいます。

音韻的な弱さを持つ「読み書き障害（ディスレクシア）」タイプの子どもでは、漢字の読みを覚えるのが苦手なために、低学年ではこのような間違いを多く起こしますが、学年が上がると漢字から読みを思い出さにくいため答えすら書けない（白紙）場合も増えてきます。

支援としては、漢字練習の時に必ず読みを唱えながら書く練習をすることや、文章の中で漢字や熟語を読んでいく練習をさせることが大切です。また、意味から覚えていくことには優れているため、漢字の「なかまあつめ」など、意味の繋がりで漢字を覚えることも有効です。漢字ドリル（片面に漢字の短文、反対面はその読みが載っているタイプ）を使った練習（宿題）では、読みの面を見ながら漢字を書く練習をさせる場合が多いですが、漢字の面を見ながらその読みを書くなどの宿題も有効かもしれません。

教材倉庫に「なんて読む」の教材があります。漢字で書かれた文に読み仮名をつける教材です。読み替えなども練習できます。こういう教材を使うのも方法です。

●形でつまづいているパターン

漢字の誤りタイプの3つ目は「形の誤り」です。形の誤りにはいくつかのパターンがあります。

・ 形態的類似字

「教える→考える」「道→遠」のように形が似ている違う字に書き間違えるパターンです。「親友→新友」のように読みも似てくると間違えることが多くなります。

・ 部分的な形の誤り

“線が一本足りない（多すぎる）” “突き出てはいけないところが突き出る” のような漢字の形の部分的な誤りです。

・ 全体的な形の誤り

漢字の部首の一部が別の字になっていたり、形が大きく歪んで存在しない字になっている場合です。私が書いた「飛」はきつとこんな文字だったのでしよう。

・ 部首配置の誤り “偏と旁が逆になる” “部首の位置関係がおかしい” などの部首の配置の誤りです。

形の誤りの背景には「空間認知の弱さ」「不器用」「視機能の弱さ」のような「書き障害（ディスグラフィア）」タイプの子や「不注意（ADD）」タイプなどの要因が考えられます。

支援としては、文字を漠然と見るのではなく細部まで観察させること、観察したことを言語化することが大切です。

教材倉庫では「パーツで覚える漢字」があります。漢字をパーツに分けてそれぞれ名前をつけます。例えば「頭」であれば「一、口、ソ、一、一、ノ、目、ハ」とパーツに分けます。そして、漢字練習をするときは「いちくちそいちいちのめは」と唱えながら書かせます。人はしゃべりながら別のことを考えることはできませんから、唱えながら漢字練習をさせることは不注意の子にも有効です。

以上、漢字が苦手な子の理解のポイントとその指導アイデアをあげました。まず、間違い分析をしましょう。そして支援を考えましょう。分析の仕方が分からない場合は子どもの間違いプリントを見せてください。一緒に間違い分析をしましょう。また、「こんな指導も効果あるかも」というようなアイデアがあれば教えてください。指導法の交流もしましょう。50年後に「〇〇！！」って言われたいためにも。

冬休み、漢字の苦手な子に特別宿題を出すこともあるでしょう。「教材倉庫」の教材も使ってもらえたらうれしいです。使い方が分からない場合は聞いてください。

来年からはことばの教室の駐車場も使えるようになりますので、帰りにでも寄ってください。お茶を入れておもてなしをしますよ。